創造主なる神様の
御心を聴く

使徒言行録14章8～18節
2022年7月10日
松田 基子 師

キリスト教は、ユダヤ教を母胎としていますが、初代教会に於いては、十字架に架かられたイェス・キリストを、メシア、救い主と信じる事に、全存在を掛ける事から、ユダヤ教からは異端とされ、独自の道を歩む事になりました。 では、**キリスト信仰が拠って立つ所**は何でしょうか。

イェス・キリストは神の独り子であり、神様の人類救済のご計画に従って、この世に人として生まれて来られ、人類の罪を一身に負って、身代わりの十字架に掛かり、人類の罪を償い、贖われました。 神様はその贖いを受け入れ、イェス様を十字架の死から3日目に復活させ、人類の罪を赦し、救いの道を拓き、イェス様を世界の主とし、また、メシアとされました。 **人は**誰も、**イェス・キリストを信じ、罪を悔い改め、自分の全存在をイェス・キリストに委ねる時、神様は、その人を、イェス・キリストの執り成しによって、御救いに入れて下さいます。 これがキリスト信仰の核**です。

この事は人間の頭で、いくら考えても、理解出来る事ではありません。 使徒パウロも、伝統的なユダヤ教の体制の中で、人間的に考えていた時は、イェス様が十字架に掛かって、神様の愛の御心を表され、全ての事を、人を生かす愛によって行動された事に対して、**律法を物差しにして計り、神の冒涜者だと断罪**しました。 そして、キリスト者を迫害しました。 そんなパウロが、**何故キリスト者に変えられた**のでしょうか。

それは、復活して天に帰られたイェス様が、パウロに、天から御声を掛けられ、彼の心に真の光を与えられたからでした。 パウロは、ガラテヤの信徒への手紙1章12節で、

「**わたしはこの福音を人から受けたのでも、教えられたのでもなく、イェス・キリストの啓示によって知らされたのです**」

と言っています。

『イェス・キリストによる救いの福音は、人間には到底考えられない、天からの啓示によるものである』

と言っています。 **啓示**と言うのは、人知では分からないことを、**神様の方から真理を表して、示して下さること**です。

イェス・キリストによる神様の**救いと言う真理**は、神様の**上からの**、一方的な愛によって**差し出された救い**です。

『それは神様に信頼し、神様の御心に従う事を求める者に与えられるものです。
人間の考えによるものでは**ありません**。』

パウロは天からの啓示を受けて後、神様はイスラエルの人だけでなく、異邦人にも等しく、キリストの救いを与えたいと願っておられる事を示され、**異邦人伝道に力を注ぎ**ました。

ローマの信徒への手紙の16章25節、26節に、パウロは、

「**神はわたしの福音、すなわちイェス・キリストについての宣教によって、あなたがたを強めることがおできになります。 この福音は、世々にわたって隠されていた、秘められた計画を啓示するものです。 その計画は今や現されて、永遠の神の命令のままに、預言者たちの書き物を通して、信仰による従順に導くため、すべての異邦人に知られるようになりました**」

と言っています。

この様にパウロの使命は、この天からの救いの啓示を、異邦人に伝えることでした。 パウロは紀元47年から、48年に掛けて、バルナバと共に、シリアのアンティオキア教会の祈りに押し出されて、第一回伝道旅行に出発しました。
まず、キプロス島に渡って、伝道し、次に地中海を北西に渡って、小アジア、現在のトルコに上陸して、ピシディア州のアンティオキアに行きました。 ここには、ユダヤ人の会堂がありました。
そこでパウロは会堂で

『神様は、イェス様の出現までイスラエルの永い歴史を導いて来られたにも拘わらず、指導者達はイェス様を認めないで、死刑にした』

こと。 しかし、

『神様は、イェス様を復活させられたこと、
信じる者は皆、この方によって義とされる
（正しいとされる）』

と語りました。

多くのユダヤ人と異邦人が、イェス・キリストを信じました。 しかし、かつてのパウロのように、自分の考えを正しいとして、律法を楯にキリスト教を異端として反対し、攻撃しているユダヤ人達も大勢いました。 パウロとバルナバは彼らによって、追い出されましたが、13章51節で、

「**二人は彼らに対して足の塵を払い落とし、イコニオンに行った。 他方、弟子たちは喜びと聖霊に満たされた**」

とあります。

この様に、イェス・キリストの福音は、神様からの啓示であることの、何よりの証拠として、聖霊が働いて、その真理を明らかにして下さると言うことです。 自分の思いを捨て、心を神様に明け渡す時、聖霊が働いて確証を与えて下さいます。それは人間の知恵によらないものですから、それだけに喜びが溢れるのです。 二人は東に160キロ程進んで、リカオニア州のイコニオンに行きました。 イコニオンはリカオニア州の中心都市で、ユダヤ人も多く、ユダヤ人の会堂がありました。 パウロとバルナバはユダヤ人の会堂がある所では先ず、会堂に行って、イスラエルの歴史を繙き(ひもとき)、神様の約束は、イェス様によって成就した事を説き明かしました。 イコニオンでも、大勢のユダヤ人やギリシャ人が信仰に入ったのですが、ここでもまた、信じようとしないユダヤ人達は、異邦人を扇動して、二人に悪意を抱かせ、石を投げつけようとしました。 そのため、二人は南に向かい、リストラに逃れました。

リストラには、ユダヤ人の会堂はありませんでした。 この町には、ユダヤ人はいなかったようです。 町の門の外側には、ギリシャの神々の主神ゼウスの神殿が建っていました。 町の門を入ると、そこは、殆どの場合、広場になっています。 人々が集まって来る、町で一番賑やかな場所です。 そこには色々な人が、様々な目的を持って集まって来ます。 商人だけでなく、土地から土地へと、哲学や宗教を語り歩く、巡回教師達は講義所や、広場で、自分の説を解きました。 また、そこには、生活の糧を得る手段の無い人たちが、物乞いに集まりました。

使徒言行録の14章8節を見ますと、

「**リストラに、足の不自由な男が座っていた。生まれつき足が悪く、まだ一度も歩いたことがなかった**」

とあります。 彼も当時の社会においては、生きていくために、他人の憐れみを求めて、そこに座っている他、無かったのでしょう。 彼の唯一の楽しみは、広場に座っている事で、多くの巡回教師達が哲学や、宗教を語ることに耳を傾け、知識を得て、外の世界を知る事だったでしょう。

彼は、体は不自由であっても、知識欲旺盛で、真理を求める人でした。 それと言うのも、パウロが町の門の広場で、

「**イェス・キリストこそ、世界の主、真のキリスト・救い主です**」

と言う語りかけに、熱心に耳を傾け聞き入っていたのです。 その熱心に聞き入る姿は、説教者パウロに伝わってきました。 パウロは話し終わると、彼に近づき、彼を見つめて、彼に癒されるに相応しい信仰があるのを認めました。 癒されるのに相応しい信仰とは、どんな信仰なのでしょうか。 この足の不自由な人は、何も癒しを求めて、パウロの話しを聞いていたのではありませんでした。 それはイェス・キリストが唯一の主、唯一の救い主である事を、心から信じて、何の条件も付けず、

『そんな救い主が居られるのなら、
そのお方を信じたい』

と、その一心だったのです。 その様に、

『真実の信仰は何の条件も付けず、自分の
全存在をそのお方に**お委ねする**』

ことです。

パウロは聖霊の導きに依って、彼の内にその信仰を認め、10節を見ますと、彼に向かって、

「**自分の足でまっすぐに立ちなさい**」

と大声で言ったのです。

「**すると、その人は踊り上がって歩きだした**」

とあります。

聖霊はこの時、パウロが語った、
『天地万物を創造された神様がおられ、
人類の唯一人の救い主、イエス・キリストについて語りました。 その事が真実である事を、証明するために、パウロを用いて、この人を癒されたのです。』
そこは町の広場です。 そこには今まで足が不自由で、立ち上がる事も出来ないで、何時も座っていたその人が、パウロによって癒され、立ち上がり、踊り上がるのを目の当たりにした人が大勢いました。

11節を見ますと、
「群衆はパウロの行った事を見て、声を張り上げ、リカオニアの方言で
『神々が人間の姿をとって、わたしたちのところにお降りになった』」
と叫んでいます。 パウロは、ギリシャ語で話していました。 ギリシャ語は公用語ですから、聞く人たちは、それを理解する事が出来ました。
しかし、彼らの日常会話は、リカオニア語です。
驚きの言葉は、当然日常語が飛び出してきました。 そのため、二人にはその意味が分かりませんでした。

彼らが何故、その様に言ったのかについて、一説に依りますと、オビディウス（BC43～AD17）と言う紀元を挟んで、その前後に活躍したローマの詩人の作に依りますと、
『この地をゼウスとヘルメスが、旅人の姿で訪れたところ、人々は極めて冷淡で、二人を、もてなす事を拒んだのですが、唯、フィレモンとバウキス老夫婦が、二人を暖かく迎えて宿を貸したのです。 神々は人々の冷淡さを怒り、洪水をもってこの町を滅ぼすのですが、フィレモン老夫婦だけは助けられたのです。』
この話を根拠に、この地方の人々は、人間離れをした奇跡を行う人に対しては、
『神の化身ではないだろうか、と思い、また、いつ神が人間の姿をとって現れるか分からない』
との思いを持っていたとされています。

人々はパウロとバルナバの外見から、バルナバをギリシャの神々の主神、ゼウスと呼びました。
パウロは熱心に福音を語ったところから、ヘルメスと呼びました。 ヘルメスは、神々への使者を務める弁舌の神でした。 足の不自由な人の癒しの奇跡は、すぐに町の外のゼウス神殿の祭司に伝えられました。
「祭司はすぐに繙祭用に準備されている雄牛、数頭と、これらの牛の飾りである花輪を運んで、家の門の所まで持って来た」
とあります。 他の訳では、門の所とあり、神殿の門なのか、町の門なのか不明だとされています。
何れにしても、二つの門は近くにありました。

何が起こるのでしょうか。 13節を見ますと、
「群衆と一緒になって、二人にいけにえを献げようとした」
とあります。 パウロとバルナバはその事が分かると、14節で、
**「服を裂いて、群衆の中に飛び込んで行き、叫んで言った。
『皆さん、なぜ、こんなことをするのですか。わたしたちも、あなたがたと同じ人間にすぎません。 あなたがたが、このような偶像を離れて、生ける神に立ち帰るように、わたしたちは福音を告げ知らせているのです』」**
と叫びました。

全ては真の神様を知らない結果から起こっていました。 そこには真の神様を知らない、人間が考えだした神々の世界がありました。 それは、神人同形多神教です。 人間の自己中心の心からは、自分に益することばかりしか考えられません。 御利益は出来る限り多く欲しいものです。
ですから、神々も沢山いた方が良いのです。
人間の考える神々は、とても人間臭く、喜怒哀楽を表します。 その為に災いが降りかからないようにと、繙祭を献げて**なだめる**のです。 人間が考える神々は、皆、人間の心を支配している欲望を満たしてくれる神を求めて、その投影として偶像を造り拝むのです。

人間自身には自分の造り主も、造り主に対する罪も、罪の結果である永遠の滅びも、そこから救われる道も分かりません。 それは全て造り主である神様から教えられなければ分からない事

です。 その真理が分からない人間は、人間以上の力に憧れます。 人間離れしたこと、例えば癒しの奇跡などが起こると、すぐにその人を神として祭るのです。 しかし、人間はどこまで行っても、造られた被造物に過ぎず、神になる事はあり得ません。

その様な事をするのは、真の神様を知らないからです。 パウロはそこで、リストラの人々に、真の神様を知らせました。 15節に、

「(そのお方は生ける神様であり、)
この神こそ、天と地と海と、そしてその中にあるすべてのものを造られた方です」

と言っています。

『神様として、崇めるべき方は、全ての被造物の創造主です。 この世界にあるものは全て、創造主なる神様が造られたものです。 **被造物は**どんなに偉大に見えても神になり得ないし、**神になってはならない**のです。 そもそも人間の**罪の根源**は、**神の様になりたい**、つまり、**自分を絶対化する**事でした。 そこから**争いと混乱が起こり**ました。』

罪は深まって行くばかりです。 しかし、神様は、そう言う人間をお見捨てになったのではありませんでした。 パウロは16節で、

「**神は過ぎ去った時代には、すべての国の人が思い思いの道を行くままにしておられました。 しかし、神は御自分のことを証ししないでおられたわけではありません。 恵みをくださり、天からの雨を降らせて実りの季節を与え、食物を施して、あなたがたの心を喜びで満たしてくださっているのです**」

と教えました。 人間は生かされ、守られ、生きて行く為の豊かな実りが与えられ、生きる喜びが与えられています。 それは、**当たり前**の**事では無く**、神様の**愛の配慮**に**負っている**のです。

リストラの人々は、二人の説得によって、やっと犠牲を捧げることを止めました。 詩編の19篇には、

「**天は神の栄光を物語り、大空は御手の技を示す。 昼は昼に語り伝え、夜は夜に知識を送る。 話すことも、語ることもなく、声は聞こえなくても、その響きは全地に、その言葉は世界の果てに向かう**」

と歌われています。 この驚くべき天体の秩序は自然に発生し、動いているとは考え難いことです。 今日、宇宙のことが少しずつ分かって来たことによって、地球は愈々、奇跡の星である事が分かってきました。

そこには神様の御心が込められている事がわかります。 パウロはローマの信徒への手紙1章20節で、

「**世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます**」

と言っています。 **被造物の全て**は、神様の**愛の御心の現れ**です。 これ程、私達人類を愛して下さる神様の御声を、**人は何故聞こうとしない**のでしょうか。 神様の愛の御心は、イエス・キリストの**十字架**に、**最も表されて**います。 私達は素直に心を開いて、この神様の上からの啓示を信じ、イエス・キリストによる**救いの福音に**、私達の、**全存在を掛けて**行こうではありませんか。

お祈りをいたします。
私達の造り主、命の与え主である、天の父なる神様
罪深い私たちを見捨てず、私達が生きるために必要な全てを備えて下さっているばかりか、罪深い私たちを救うために、御子イエス・キリストをお与え下さった事を心から感謝します。
この天からの啓示を、人間の考えで疑うことなく、一途に主に信頼し、信じ従う者とならせて下さい。
尊い救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りをいたします。
アーメン。